年間第4主日：主の奉献（主日の福音を中心とする「霊的な読書」）

（一）聖書朗読

ルカ2:22-40

モーセの律法に定められた清めの期間、マリアとヨセフは初めて生まれたイエスを主に献げ、聖別されるため、エルサレムに連れて行った。イスラエルの慰められるのを待ち望むシメオンは、霊に導かれて神殿に入り、両親と幼子を祝福した。彼は、イエスが反対を受けるしるしとして定められ、マリア自身も剣で心を刺し貫かれることと言った。また、断食したり祈ったりしている女預言者アンナも、神殿に来て、神を賛美し、幼子の子とを話した。ナザレにいる幼子は、たくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれていた。

（二）カテキズムの響き（カトリック教会のカテキズムの番号；YOUCAT #88, 101-102）

#529, 583- 587

イエスは以前の預言者たちと同様に、エルサレムの神殿に深い敬意を表されました。生後四十日目には、ヨセフとマリアとによって神殿で奉献されました。イエスの神殿での奉献は、イエスが主に属する初子であることを示します。シメオンとアンナは、全イスラエルの待望を込めて、救い主に出迎えを行っているのです。この時、イエスは待望メシア、異邦人を照らす光、イスラエルの誉れとたたえられ、同時に反対を受けるしるしであると告げられました。マリアに予告された苦しみの剣は、神が万民のために整えてくださった救いをもたらす十字架の、もう一つの、完全で、比類のない奉献を告げるものです。事実上、イエスが予告した神殿の破壊は、イスラエルの宗教的指導者がイエスへ反対する機会になります。優れた神のわざである罪の贖いにおけるイエスの役割は、彼らにとっては、真のつまずきの石であったのです。イエスにとって、神殿は御父の住まい、祈りの家であり、神に出会う特別な場所です。イエスは、ナザレで過ごされた間にも、公生活中にも、毎年、過越祭、またはユダヤ人の大祭日に神殿に巡礼をなさいました。にもかかわらず、受難を前にしたイエスは、この見事な建物の破壊を予告しました。これは、イエスの肉体は殺害されることです。つまり、十字架につけられ、人類のために命を捧げる犠牲ということです。さらに、イエスご自分を神殿と同一視し、ご自分が神の決定的な住まいであることを人々の間で示されました。

（三）カテキズムの学び（『コンペンディウム』カテキズム要約の番号）

#115, 119：

- ① キリストの生涯全体が、御父の救いの計画を実現するための、御父への自由な捧げものです。
- ② キリストの苦しみと死は、いかにキリスト人性が、すべての人の救いを望まれる神の愛の自由で完全な道具であるかを示しています。
- ③ キリストはご自分の死と関連づけて、神殿の崩壊をも予告なさり、ご自分を人々の中にある神の最終的な住まいとしてお示しになりました。

結語／祈り：

全能永遠の神よ、御ひとり子は人となられ、今日神殿に捧げられました。私たちも聖霊の光に従い、罪の闇を捨て、自らをあなたに捧げることができますように。